

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23530622

研究課題名(和文)ジェンダーをめぐるコミュニケーション齟齬の研究：専門的概念の再帰性に着目して

研究課題名(英文)Communication Gap in Gender Disputes

## 研究代表者

江原 由美子 (EHARA, Yumiko)

首都大学東京・人文科学研究科(研究院)・教授

研究者番号：20128565

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：学問の世界において生み出された概念である「ジェンダー」は、広く一般に使われる言葉として普及した。だが、その使用が政治的に批判されるようになると、「科学・社会・政治」が交錯し、相互に影響を与える状況が生じた。このような状況は、どのようなコミュニケーション齟齬を生み出したのだろうか。

学問の世界における「ジェンダー」概念は、もともとかなり限定された文脈において創案されたものであるが、その文脈から切り離されることで、かえって広範な応用可能性を持つことになった。だが、その一方で、学問的であるか否かにかかわらず、「ジェンダー」概念の使用が批判されるという、複雑な政治的状況を招くことにもなったのである。

研究成果の概要(英文)：The concept of “gender,” originally devised in the academic context, has now come to be widely used by ordinary people. But once the criticism on the use of the concept has been politically raised, there emerges a complex argumentative situation: the situation on which academic, civic and political arguments are highly intertwined. How does the situation cause communication gap in gender disputes?

The original concept of “gender” had an academic and very specific meaning. But separated from the original context, the concept of “gender” acquired a wide range of application in multiple contexts. Although the change of the usage seems to have positive effects on civic arguments, it also had the negative aspects. Critics on the concept of “gender” attacked various arguments regardless of their context. As a result, now we see a very complicated political situation.

研究分野：社会学(社会学理論・ジェンダー論)

 キーワード：ジェンダー テキストマイニング レトリック分析 エスノメソドロジー セクシュアル・マイノリティ  
 イ 科学コミュニケーション

## 1. 研究開始当初の背景

言うまでもなく「ジェンダー」は、学問的言説領域において生み出された概念である。女性学やジェンダー研究は、当該社会において自明とされていた「男らしさ」や「女らしさ」等の性別にかかわる観念が、様々な社会事象と関連しながら当該社会において社会的に構築されてきた側面があることを明らかにし、性別にかかわる社会現象を明らかにする視点を明確にするために、「ジェンダー」という概念を生み出したのである。

ところが、「ジェンダー」概念は、学問的言説領域に留まることなく、市民的言説領域にも広がっていった。そもそも女性学やジェンダー研究は、「女性解放」や「女性の地位向上」といった問題関心から、既存の学問では問われないままになっていた様々な社会問題（女性問題）を解明するために生まれた学問であり、その意味で強い実践的志向を持っていた。それゆえ、女性学やジェンダー研究からは、「開発とジェンダー」「ジェンダー予算」「ジェンダーエンパワメント指数」など、社会的経済的政策に影響を与えるような「ジェンダー」に関わる様々な概念が提起されることになった。それゆえ、学者以外の多くの市民もまた、「ジェンダー」という用語を知ることになり、またそれを使用するようにもなったのである。

だが、こうして広がった「ジェンダー」概念に対して、その使用が政治的に批判されるようになると、「科学・社会・政治」の各領域が交錯し、相互に影響を与えるコミュニケーション状況が生じた。

本研究は、このような言説領域の交錯において生じるコミュニケーション齟齬の解明を目指したものである。

## 2. 研究の目的

ジェンダーをめぐるコミュニケーション齟齬を様々な角度から解明するため、以下のような目的を設定した。

(1) 学問的言説領域における「ジェンダー」概念の用法とその変遷の解明：「ジェンダー概念」はこれまで、「セックス/ジェンダー」という図式的な定義の使用されることが通例とされてきた。これを受けて、“gender”という語の使用の歴史の変遷を「どのようにセックス/ジェンダーという図式が成立したか」に焦点をしばって考察する。

(2) 学問的言説領域・市民的言説領域における「ジェンダー」概念の普及過程の解明：学術誌に限ることなく、広く定期行物を対象とし、「ジェンダー」という語句の諸意味や、その通時的な変化を解明する。

(3) 「ジェンダー」概念の使用をめぐる政治

的状況の解明：2000年代前半に保守系のメディアを通じて広まった「バックラッシュ」言説、つまり、「男女共同参画」「ジェンダーフリー」「過激な性教育」バッシングが、どのようにフェミニズムを批判しているのかを解明する。

(4) 日常的なコミュニケーションにおいて性別カテゴリーが持つ意味の解明：FiXのインタビューデータを通じて、ハロルドガーフインケルの用いた、女/男であるためのpassingがどのようになしとげられるのか分析する。

## 3. 研究の方法

研究目的(1)～(4)について、それぞれ以下のような研究方法を採用して調査・分析をおこなった。

(1) John Money, Robert Stoller, Ann Oakleyなどの英米圏の科学者がgenderを用い、それが日本でどのように参照され、それによってどのような主張がなされてきたのか、テキスト分析の手法により明らかにする。

(2) 2011年6月時点で、国立国会図書館の雑誌記事索引のタイトル検索で、検索語「ジェンダー」によりヒットした記事約4,500件の題目、および、2011年7月から9月にかけて収集できた記事本体、約2,000件を考察対象に、テキスト・マイニングの方法を用いて分析し、「ジェンダー」に関連する諸語句の出現頻度、および、それら諸語句のあいだの共起頻度を計測する。

(3) 保守系論壇誌『諸君!』を対象に、「バックラッシュ」言説のレトリックを通時的に比較分析する。また、その分析に先立ち、1980年1月号(12巻1号)から2009年6月号(最終号)の約30年分(354冊)の『諸君!』の収録記事について、「国立国会図書館雑誌記事索引」のデータを実際の目次と照合しながら整理しつつ、同範囲の巻号について、全ての読者欄の投稿をデータベース化し、収録記事(誌面構成)の変化を確認する。

(4) 自助グループのイベントで被調査者を募り、インタビュー調査した結果を、相互行為論的に分析する。

## 4. 研究成果

研究目的(1)～(4)について、それぞれ以下のような結論を得た。これらの結論をまとめると、つぎのようになる。つまり、学問的言説領域における「ジェンダー」概念は、もともとかなり限定された文脈において創案されたものであるが、その文脈から切り離されることで、かえって広範な応用可能性

を持つことになり、市民的言説領域に普及していった。だが、その一方で、学問的言説領域と市民的言説領域の区別なく、「ジェンダー」概念の使用が批判されるという、複雑な政治的状況を招くことにもなったのである。

(1) 日本の性科学、フェミニズム、人文社会思想それぞれが“gender”概念を使い始めたが、その大元には Robert Stoller の思想からの借用があり、“gender”概念の始祖である John Money の影響は日本では殆ど見られないか、あっても非常に弱いものであったことが明らかになった。

(2) 過去 30 年間の ジェンダー言論 の内容における大局的な変化は、1990 年代半ばに向けた強固な構造化、1990 年代後半から 2000 年代初頭における使用語彙の多様化、1990 年代半ば以降、2000 年代全般における構造的弛緩、2000 年代全般における語彙の緩やかな再集約化である。

(3) 「バックラッシュ」言説は、提喩的な「反共」言説によって「敵」を抽象化している。「諸君！」では、「バックラッシュ」言説に先立って、「働く女性」「夫婦別姓」「主婦」「少子化」をトピックとする反フェミニズム言説が、以前から登場していた。このうち、1990 年以降の反フェミニズム言説には、繰り返し「反共」の言説形式がみられるのだが、「バックラッシュ」言説には、それまでの「反共」言説にはない特性がある。それは、「フェミニズム」の主張と「共産主義」の主張の類似性を批判する、隠喩的な「反共」言説ではなく、「フェミニズム」を「共産主義」の一種として抽象化する、提喩的な「反共」言説の形式をとっている点である。

(4) 我々が参加する相互行為は多層的な特徴 (multi-layered character) をもっており、我々の相互行為における性別カテゴリーのレリヴァンスも多層性を持っているといえる。それは、発話によってレリヴァントになるだけでなく、「見ること」によってもレリヴァントになりうる。

本研究がその解明を目指したコミュニケーション齟齬は、「ジェンダー」という特定概念をめぐるものであった。だが、同様のコミュニケーション齟齬は、現代社会において頻発することが予想される。

現代社会における様々な社会問題は、その社会問題を記述・解明する「科学的」「学問的」な概念と密接な関連性を持っている。そもそも「なにが問題であるか」が、「科学的」「学問的」な概念を用いてはじめて認識される場合が多いのである。たとえば、「地球温暖化」「気候変動」「パンデミック」「ドメスティック・バイオレンス」といった社会問題

は、これらを記述する自然科学や社会科学の知見を抜きに語ることはできないだろう。

つまり、はじめに指摘「科学・社会・政治」の各領域が交錯し、相互に影響を与える コミュニケーション状況は、「ジェンダー」概念に限ったことではなく、広く自然科学・社会科学の概念について生じうるのである。

だが、学問的言説領域に由来する概念が、従来の言説空間を超えて流通するようになると、学問のみならず、多様な言説空間における異なる立場からの批判をも引き寄せることになる。そもそも、学問的・市民的・政治的な各言説領域は、それぞれの言説空間を維持するために固有のコミュニケーション・ルールを装置化している。しかし、そうした領域を超えて交錯するコミュニケーション的相互行為は、コミュニケーション齟齬が生じる確率を高めることになるのである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

### [雑誌論文](計 5 件)

左古輝人、「資料集 1980 年代から 2010 年までの『ジェンダー』:日本の定期刊行物における」, 人文学報, 査読無, No. 482 (社会学 49), 2014, 111-131.

EHARA, Yumiko, “Gender Studies in Sociology in Post-war Japan,” International Journal of Japanese Sociology, 査読無, No. 22, 2013, 94-104.

江原由美子、「非正規問題とジェンダーの関連性」, Business Labor Trend, 査読無, 2013 年 10 月号, 2013, 3-6

江原由美子、「グローバル資本主義を撃つ『フェミニスト社会理論』を：日本のフェミニズム『90年代以降の閉塞状況』を問う(後編)」, インパクション, 査読無, No. 186, 2012, 148 - 163

江原由美子、「グローバル資本主義を撃つ『フェミニスト社会理論』を：日本のフェミニズム『90年代以降の閉塞状況』を問う(前編)」, インパクション, 査読無, No. 185, 2012, 196-210

### [学会発表](計 7 件)

SAKO, Teruhito, “Introduction to Text Mining,” International Foundation Courses and English Language Studies (IFCELS), February 7th, 2014, University of London, London(UK)

SAKO, Teruhito, “Society is by no Means an Entity but a Bundle of Usages of the Term Society,” Society & the Social, Sheffield Centre for Early Modern Studies (SCEMS) and the White Rose Centre for Civil Society (WRCCS),

January 29th, 2014, University of Sheffield, Sheffield(UK)

須永将史,「ジェンダーをめぐるコミュニケーション齟齬の研究(1)」,日本社会学会,2013年10月12日,慶応大学三田キャンパス(東京都港区三田)

左古輝人,「ジェンダーをめぐるコミュニケーション齟齬の研究(2)」,日本社会学会,2013年10月12日,慶応大学三田キャンパス(東京都港区三田)

林原玲洋,「ジェンダーをめぐるコミュニケーション齟齬の研究(3)」,日本社会学会,2013年10月12日,慶応大学三田キャンパス(東京都港区三田)

鶴田幸恵,「ジェンダーをめぐるコミュニケーション齟齬の研究(4)」,日本社会学会,2013年10月12日,慶応大学三田キャンパス(東京都港区三田)

TSURUTA, Sachie, "The Order of the Visual Field Shows the Uniqueness of Sex Categorization," International Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis (IEMCA), August 7th, 2013, Wilfrid Laurier University, Waterloo(Canada)

須永 将史 (SUNAGA, Masafumi)

〔図書〕(計1件)

江原由美子,左古輝人,鶴田幸恵,林原玲洋,須永将史,自費出版,『ジェンダーをめぐるコミュニケーション齟齬の研究:専門的概念の再帰性に着目して』,2014, pp1-pp64

〔その他〕(計1件)

左古輝人,法政大学出版局,ジェニファー・ジャーモン著『ジェンダーの系譜学(翻訳)』,2012,418

6. 研究組織

(1)研究代表者

江原 由美子 (EHARA, Yumiko)  
首都大学東京・人文科学研究科・教授  
研究者番号:20128565

(2)研究分担者

左古 輝人 (SAKO, Teruhito)  
首都大学東京・人文科学研究科・准教授  
研究者番号:90453034

鶴田 幸恵 (TSURUTA, Sachie)  
千葉大学・文学部・准教授  
研究者番号:00457128

(3)連携研究者

林原 玲洋 (HAYASHIBARA, Akihiro)  
首都大学東京・都市教養学部・客員研究員  
研究者番号:60590544

(4)研究協力者